

リンダウ会議に参加して

一ノ倉 聖[†] 〈物質・材料研究機構 ICHINOKURA.Satoru@nims.go.jp〉

1. リンダウ会議とは

リンダウ会議とは、毎年20名程度のノーベル賞受賞者を招き、それとともに数百名の若手研究者を世界各国から募って行う会議です。1951年から開催されており、4年サイクルで物理分野が回ってきます。(物理→化学→医学・生理学→3分野合同→…)日本学術振興会からご支援をいただき、2016年6月末に参加してまいりました。

リンダウはドイツの街で、ミュンヘンから鉄道で向かうことができます。ドイツといっても、図1のようにスイス・オーストリアとの国境に位置するボーデン湖畔にあるのでチューリッヒ経由も可能です。リンダウの中心は同図に示した島で、会議もそこで行われます。島自体は大きくなく、徒歩で十分に回れるのですが、到着直後は石畳にスーツケースの車輪を取られながらホテルを探して曲がりくねる路地を歩いたことを覚えています。保養地として人気の町で、ハーバーには色とりどりのヨットが停泊しています。メインハーバーは駅にほど近く、リンダウの象徴とも言えるライオン像と灯台に守られています(図2)。ハーバーを望むようにホテルのレストランが並んでおり、テラス席か

ら夕日に照らされる美しい風景を眺め、夕食を楽しむことができます。ただし、夕立は降りやすいようですので、パラソルの下を確保することが肝要です。

さて、会議の内容ですが、通常の学術会議とはかなり異なります。午前中はノーベル賞受賞者の講演を聴きますが、内容は研究に限らず、バラエティに富んでいます。受賞研究を実際に行っていた当時の思い出話、果てはシャボン玉の物理やマンハッタン計画の様子、などなど。昼食休憩のあとは当日講演した受賞者と一対多のディスカッションの時間が設けられます。このほかに、受賞者数人によるパネルディスカッションが設けられる場合もありました。例年は参加者による研究発表はなかったのですが、2016年からポスターセッションが設けられ、私も発表を行いました(図3)。

各国の支援を受けたソーシャルイベントも盛りだくさんです。初日のオープニングセレモニー、2日目はオースト



図1 ボーデン湖、リンダウ島の上空写真。

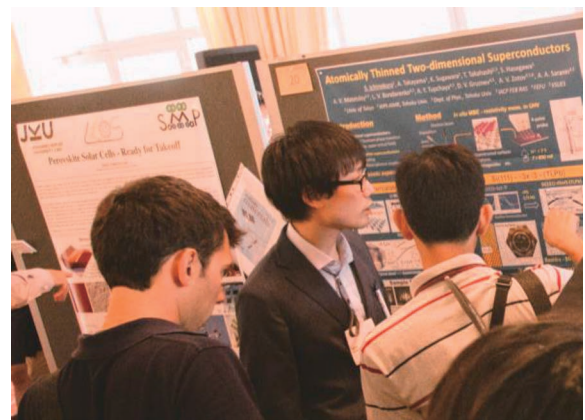


図3 ポスターセッションの様子。中央が筆者。



図2 ポート上から振り返る、リンダウのメインハーバー。



図4 マイナウ島の庭園。

[†] 執筆時所属：東京大学大学院理学系研究科

リア主催の(ドイツではない!)バンケット, 3日目は企業見学, 4日目は地元の民族楽器の演奏を交えたバンケット. そして最終日には大きなボートに乗って, 湖の反対側にあるマイナウ島へエクスカーションに出かけます. マイナウ島とはスウェーデン王室の親戚であるベルナドッテ家の所有地で, 同家の居住する宮殿を中心に, 島全体が図4のような美しい庭園となっています.

しかし, 参加者にとって最も重要であるのは, 若手研究者同士の交流かもしれません. 講演の合間のコーヒープレイク, 相席の食事, 常にかやがやと話すこととなります. そもそも, リンダウ会議の期間中は島中が若手研究者で溢れるので, どこでも会話を始めることができます. 自己紹介に始まり, どこから来たの, 何の研究してるの, といった感じで.

2. 実際のところ: 私の場合

このような会議に参加した私の様子ですが, とにかく何かを得ようと意気込んで臨んだのはいいものの, “圧倒される” 場面がほとんどでした. 例えば, George Smoot 教授の LIGO による重力波の検出に関する講演です. 歴史と物理体系が基礎から語られ, そのスケールの大きさを強烈に印象付けられました. さらに, 重力波検出のきっかけとなったブラックホール連星の衝突・合体をアニメーションで再現. 極めつけは, 検出した信号を“音”として聴かせられました. 連星が近づき, 衝突すると, 重力波が「ひゅー, ポン!」と“聞こえて”思わず笑ってしまいました. 他の講演も非常にエンターテイメントに富んでおり, 聴衆も“観客”としてプレゼンテーションを楽しんでいました. 気の利いたジョークには拍手が送られ, まるでライブのように会場全体に一体感がありました. キャリア・国境を越えて, 学問の自由と楽しさを共有する幸せな時間でした.

ディスカッションの部では, 若手研究者がさらにエネルギーを発揮します. 「あなたの研究のモチベーションは何ですか?」「どうしたら役に立ちますか? 発展させられますか?」といった実に率直な問いがノーベル賞受賞者に投げかけられ, 受賞者もそれを当然のように受け止めて真摯に答えていました. 恐らく, 彼らは「ノーベル賞受賞者には素晴らしい研究ができて, 自分たちにはできない」という考えがないのだと思います. 常に, 受賞者の“物の考え方”を吸収しようとしていました. 受賞者たちもそれを楽しんでいる様子で, ディスカッションの時間だけでなく, 休憩時間にも若手研究者の前に姿を現し, インタラクションを持っていました.

もちろん私も大いに交流を楽しんできましたが, 多少, 緊張しながらであったことは否めません. 私の英語力や人

格の問題もありますが, 欧米式の対話文化に馴染みがなかったのだと思います. 日本では, 議論やセミナーの体裁をとっても, 年配の人物から情報を賜ったり, お伺いを立てたりするだけのことが多いように思います. 一方で欧米からの参加者は知識量・立場の違いを越えて議論を交わしていました. この“対話”の文化は非常に優れていると感じました. アイデアの源泉としてディスカッションを重要視しているようでした. 実際, Max Plank 研究所では毎日のようにゲストが来て, セミナーが行われると聞きました. 特に EU 圏はもはや国境がないようなもので, 多くの参加者が出身国以外の機関で研究を行い, 活発に議論していました. 日本は島国であるせいか, そこまで気軽に交流はできていないように思います. 他のアジア諸国からの参加者はむしろ国際志向が強く, 積極的な交流を行っていました. 日本はなまじ独自に学問・研究体系を発展させてきたため, 閉じてしまいがちなかもしれません.

このように, 文化の違いにいささかショックを受けて帰国した私ですが, 思い返せば, ポスターセッションでは多くの参加者が列をなすほど集まってくれました. 私の専門は表面物理学で, シリコン表面や2層グラフェンの超伝導化について発表しました. 物理的には空間反転対称性の破れが影響しており, 材料としても単原子層物質群と絡んでいるから面白い, と解説しました. しかし, どうやって研究を構想したか, 今後の展望はどうか, といったアイデアに関する質問が多く寄せられました. 普段から大局的な観点に立って研究の意義・方向性を議論する必要があると感じました. その点では欧米式のセミナー文化を範とすべきだと思います. 一方で, とにかく独自のテーマに目を付け, ひたすら手を動かして掴み取った成果が多くの興味を引いたことは嬉しく思います. 日本の研究の成功例ではそのようなケースを多く聞くように思います. 今回の会議では, 日本からは天野先生, 梶田先生がご参加されていました. お二人のご講演でも, 世界の流行と異なる観点から切り込むため, 自ら手を動かして実験装置の作製やデータ解析を粘り強く行った結果がノーベル賞級の発見につながった, という経緯がお話しされていました.

リンダウという地で, 酸いも甘いも, 非常に刺激的な経験ができました. 80の国々から一挙に集まってきた何百人もの同世代の優秀な研究者と交流する機会はなかなかありません. 参加者の方々が情熱をもってこの特別な機会に臨んでいたために, 一週間という短い期間でも, 実り多きものとなったのだと思います. 最後に, 会議への参加をご推薦, ご支援いただいた皆様にこの場を借りてお礼申し上げます. ありがとうございます.

(2016年12月28日原稿受付)